

因果律と親和力の法則

(100)

宇宙の根本的摂理が二つある。その一つが因果律、つまり原因には必ずそれ相当の結果が生じ、その結果が新たな原因となつて次の結果を生んでいくというもので、逆の見方をすれば、結果には必ずそれ相当の原因があるということで、偶然そうなったということはありえないということになる。

またそれは寸分の狂いもなく自動的に作用し、いかなる信仰、いかなる儀式によつても干渉することはできないことを、高級靈が異口同音に語っている。自分が蒔いたタネは自分が刈り取るというもので、それは数学的正確さをもつて作動する。いかに弁解しても良心の呵責が消えないのは因果律が絶対だからである。

もう一つは親和力の法則、つまり“類は類をもつて集まる”という法則である。地上でもある程度はその傾向を認めることができるが、けつして絶対ではないし、そう速やかでもない。これは物的五感によつて営まれてゐる地上特有の環境条件のせいである。言つてみれば鈍重でまどろっこしいのである。

ここから相対性、対立性、両極性といった側面が生まれる。寒と熱、美と醜、清と濁、強と弱、男性と女性、こうした対照的なものが同居しているのが地上界の特徴で、そこから地上ならではの貴重な体験が得られる。

次章で取りあげる“再生”つまりもう一度地上へ生まれてくる

ことができるのも、その地上ならではの体験を求めさせるための神の配慮である。

さて死後の世界においては親和力の働きが即効的となる。似た者同士が集まり異質の者は反撥し合う。かくして美しい界層はますます美しくなり、醜い界層はますます醜くなつていく。そして邪心に満ちた者ばかりが集まつてその邪心をむき出しにし合いながら生活している。そこを地獄という。

西洋にも東洋にも昔からいわれる。“獄図絵”というのが伝えられているが、あれは人間が恐怖心を混じえて大げさに描いたもので、いかにも悪魔が憎しみに燃えて残虐のかぎりを尽くしているかの印象を与えるが、他獄といつても所詮は人間の魂の醜さと弱さの反映にすぎない。

霊は実在する、しかし眞贋乱舞の中で 潮文社

近藤千雄